

# 比 恵 86

－比恵遺跡群第146次調査報告－

福岡市埋蔵文化財調査報告書 1374 集

2 0 1 9

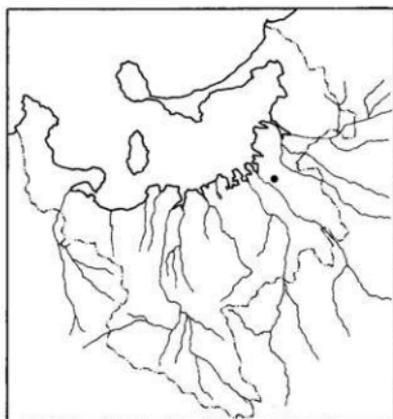
福岡市教育委員会



# 比 恵 86

— 比恵遺跡群第 146 次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書 1374 集



遺跡略号 HIE - 146

調査番号 1618

2 0 1 9

福岡市教育委員会



## 序

玄界灘に面し古くから大陸との文化交流の玄関口であった福岡市には、豊かな自然と文化が残されています。その中でも博多区は大陸との交流で古くから栄え、遺跡も多く存在しています。これらを保護し、未来へと伝えていくのは本市に課せられた責務であります。しかし、近年の著しい都市化による市街地の拡大により、その一部が急速に失われつつあることもまた事実です。福岡市教育委員会は開発によってやむを得ず失われていく遺跡について、事前の発掘調査を行い、記録の保存に努めています。

今回報告する比恵遺跡群の発掘調査報告書は共同住宅建設に伴う調査成果についての記録です。この調査では弥生時代から中世の集落を確認しました。本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となり、また研究資料として御活用頂ければ幸いに存じます。

最後に発掘調査から報告書の刊行に至るまで、アマカル株式会社様をはじめとして多くの方々のご理解とご協力を賜りましたことに対して心から謝意を表する次第であります。

平成 31 年 3 月 25 日

福岡市教育委員会  
教育長 星子明夫

## 例 言

- 本報告書は博多区博多駅南 4 丁目 122 - 4・7・8、123 - 3・6・8・9・10 の共同住宅建設工事に伴って 2016 年 8 月 1 日から 2016 年 9 月 23 日にかけて発掘調査を行った比恵遺跡群第 146 次調査の報告書である。
- 本書に収録した発掘調査は福岡市経済観光文化局の屋山洋が担当した。
- 遺構実測・写真撮影は屋山が、遺物実測と製図等を平川敬二と屋山が担当した。
- 本書で用いた方位は磁北である。
- 本書に関わる図面・写真・遺物など一切の資料は福岡市立埋蔵文化財センターに収蔵・保管される予定である。

遺跡調査番号	1618	遺跡番号	0127	分布地図番号	東光寺37
調査地番	福岡市博多区博多駅南4丁目122-4・7・8、123-3・6・8・9・10				
開発面積	619㎡	調査面積	217㎡	調査原因	共同住宅建設
調査期間	20160801	～	20160923	担当者	屋山 洋

# 目次

## 本文

I	はじめに	1
II	調査の記録	3
1.	調査の経過	3
2.	調査の概要	3
3.	遺構と遺物	5
1)	井戸	5
2)	溝	7
3)	竪穴式住居	13
4)	土坑	15
5)	その他の遺構と遺物	15
4.	小結	15

## 挿図

第1図	周辺遺跡分布図	2
第2図	調査地点位置図	2
第3図	調査範囲図	3
第4図	調査区全体図	4
第5図	SE1128 遺構・遺物実測図	6
第6図	SE1128 遺物実測図	7
第7図	SK1138 遺構・遺物実測図	8
第8図	溝遺構・遺物実測図	9
第9図	SC1156 遺構・実測図	10
第10図	SK1174 遺物実測図	11
第11図	SK1042・1101 遺構・遺物実測図	12
第12図	掘立柱建物遺構・遺物実測図	13
第13図	その他の遺物実測図	14

## 表

表1	遺構台帳1	16
表2	遺構台帳2	17

## 図版

図版1	1. I区全景 2. II区全景	18
図版2	1. I区南半部遺構出土状況 2. II区北半遺構出土状況 3. SD1116 土層 4. SE1128 遺物出土状況 5. SE1128 底部遺物出土状況 6. SE1128 完掘状況 7. SK1042 8. SK1101	19
図版3	1. SE1138 遺物出土状況 2. SE1138 下層 3. SC1156 4. SC1156 土層 5. SK1171 遺物出土状況	20

# I. はじめに

## 1. 調査に至る経過

平成28年(2016年)2月29日付けでアミカル株式会社より福岡市教育委員会へ博多区博多駅南4丁目122-4-7-8、123-3-6-8-9-10の共同住宅建設に伴う埋蔵文化財の有無についての照会(27-2-1040)が提出された。

申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である比恵遺跡群の中央部に位置し、周囲でも多くの地点で発掘調査が行われていることから、埋蔵文化財課事前審査係では建設に先立って埋蔵文化財の発掘調査を行い、記録保存を図ることが必要であると判断して6月8日に確認調査を行ったところ、現地表下80cm前後で遺構が確認された。その結果を元に協議を行い平成28(2016)年8月1日から9月23日の期間で発掘調査を行うこととなった。

調査期間中は休憩所や水道の設置など原因者及び関係者各位の多大なご協力を頂いた。記して感謝したい。

## 2. 調査の組織

調査委託 アミカル株式会社

調査主体 福岡市教育委員会

(発掘調査 平成28年度 : 整理報告 平成30年度)

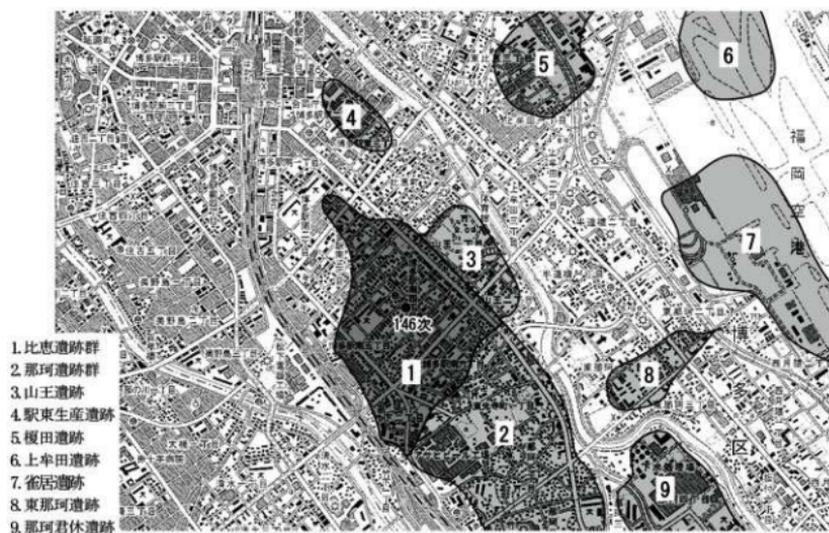
調査統括 文化財活用部(調査時 文化財部)埋蔵文化財課長

		平成28年度	常松幹雄
		平成30年度	大庭康時
	同課調査第1係長	平成28・30年度	吉武 学
庶務	埋蔵文化財課管理係	平成28年度	松原加奈枝
	文化財活用課管理調整係	平成30年度	松尾智仁
調査担当	埋蔵文化財課		屋山 洋

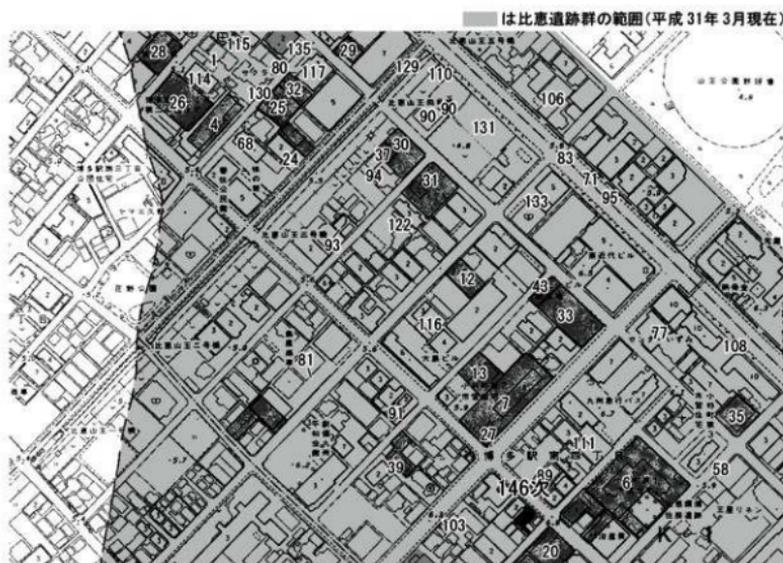
## 3. 位置と環境

比恵遺跡群は福岡平野の中央を博多湾に向かって流れる那珂川と御笠川に挟まれた標高5~10mの低位丘陵上に立地する。丘陵は花崗岩の風化礫層を基盤とし、その上に阿蘇山の火砕流である八女粘土層と鳥栖ローム層が堆積している。全体に鳥栖ローム層の上面が遺構検出面となることが多く、今回の146次でも鳥栖ローム上面で遺構を確認した。比恵遺跡群が立地する丘陵上には春日市の須玖遺跡群や福岡市の井尻B遺跡、五十川遺跡、那珂遺跡などがあるが、弥生時代の奴国の中心と考えられる須玖岡本遺跡とその港があった可能性がある比恵遺跡群に挟まれているだけに、弥生時代から古墳時代初頭にかけての遺構が密に分布している。

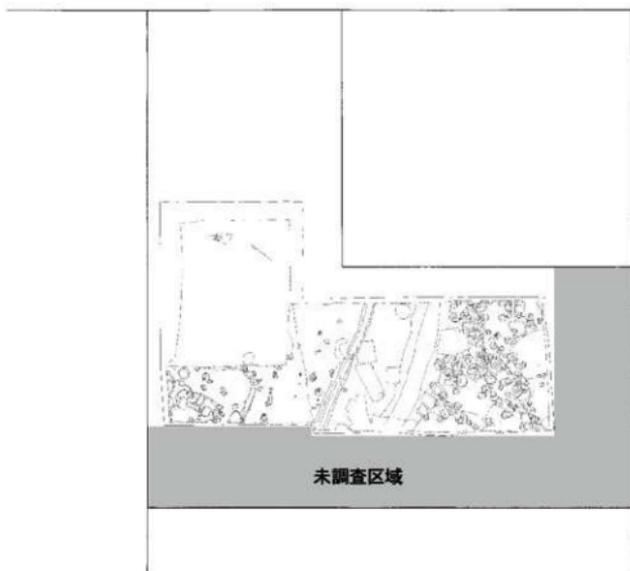
比恵遺跡群は南側に隣接する那珂遺跡とは浅い谷で区分されている。もっとも古い遺物は旧石器時代のナイフ型石器が出土しているが、遺構としては現在のところ縄文時代晩期である突帯文期の遺構が最も古く、丘陵端部で確認されている。弥生時代中期以降は集落が丘陵全体に広がり、銅鍬や青銅製鋸先などの青銅製品が出土すると共に、青銅器生産に使われた埴塼や鋳型が出土するなど奴国の拠点集落のひとつであったと考えられる。古墳時代後期から古代にかけては遺跡北側で大型掘立柱建物群とそれを囲む柵列が確認されているが、これらは大宰府の前身である「那津官家」と推定されるなど、弥生時代以降においても重要な遺構が多く集中する地域である。



第1図 周辺遺跡分布図



第2図 調査地点位置図(1/4000)



第3図 調査範囲図(1/300)

## II. 調査の記録

### 1. 調査の経過

申請地は北端と南東端が道路に面するL字型を呈し、敷地面積は619.04㎡を測る。予定される建物は敷地中央に位置し、道路に面する両端は駐車場として使用される。また、試掘結果では敷地北東側は以前の建物基礎によりGL-110cmまで削平されており、遺構は柱穴を1基確認したのみである。そのため発掘調査は遺構が残っており、また建物基礎の掘削により遺構が破壊される220㎡を対象とした。調査時には壁の崩落防止のため境界から約1mの残地を設定して掘り下げを行った結果、調査面積は217㎡となった。調査は廃土置き場の関係から南北に分けて南側をⅠ区、北側をⅡ区とし、8月1日にⅠ区の表土剥ぎと機材搬入を行い翌8月2日から発掘調査を開始した。9月1日にⅠ区の全景写真を撮影して調査を終え、9月7日にⅡ区の表土剥ぎを行って9月8日から9月20日までⅡ区の調査を行った。9月21日にⅡ区の埋め戻しと機材の撤収を行い調査を終了した。

### 2. 調査の概要

調査区の南端は道路面からの深さ約60cm、北西端で50cmで遺構面の鳥栖ロームに達したが中央部は削平のため遺構面が下がっており、ロームまでの深さは100cmを測り、そのため中央部では溝と井戸以外の遺構は遺存していなかった。

遺構は調査区の南半で弥生時代から古墳時代の柱穴群と土坑、中央部では溝2条と井戸1基が出土した。溝は約2.5m離れて並行しており、南側のSD1120は近世、北側のSD1116は古代末～中世初頭と考えられる。北側では古墳時代前期の竪穴式住居らしき掘り込みと柱穴群が出土した。



第4図 調査区全体図 (1/100)

### 3. 遺構と遺物

#### 1) 井戸

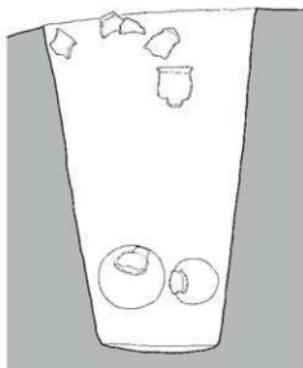
**SE1128**(第5図) 調査区中央部の東縁沿いに位置する。検出面の標高は調査区南側に比べると40cm程低い。平面は東西にやや長い楕円形で長径96cm、短径84cmを測る。断面は底面にむけて緩やかにすぼまり、底径48cm、検出面からの深さ140cmを測る。埋土は暗茶褐色土でレンズ状に堆積しており、検出面付近で弥生時代中期の甕の破片が、底面から20cm程上で弥生時代後期前半の壺(遺物番号001・002)が2点出土した。出土遺物(第5・6図001～015)。001は壺である。口縁を一部欠損するが、接合する破片は出土せず人為的打ち欠きの可能性がある。推定口径19.5cm、器高33.1cmを測る。色調は淡黄褐色を呈す。調整は内外面とも縦ハケを施すが、口縁端部両面は摩滅が著しく不明である。外面は胴部側面に大きな黒斑があり、その周りは灰白色を呈す。002は頸部から上を打ち欠いて短頸とし、さらに口縁の一部を打ち欠く。現状口径11.2cm、器高22.8cmを測る。外面は全体に粗い縦ハケ、底部は粗いナデ、頸部上半は横ナデを施す。外面は橙色と灰白色の斑で胴部に黒斑がみられる。003は壺である。復元口径23cmを測る。淡橙色を呈す。摩滅が著しいが、外面は縦ハケで口縁端両面に横ハケを施す。口縁内面の一部に赤色顔料が残る。白色砂を多量に含む。004は壺で口径12.4cmを測る。両面とも淡橙色を呈し、胎土には微細な白色砂を多く含む。調整は両面とも縦ハケで、口縁両面は横ナデを施す。005は壺底部で復元底径8.6cmを測る。調整は不明瞭だが外面はミガキで赤色顔料が残る。内面は縦ハケ後ナデと思われ、淡橙色を呈す。006は高坏口縁で端部を欠く。口縁と内面は横ナデで赤色顔料が残る。外面は不明。1mm以下の白色砂を多く含む。007は器台で復元底径10.4cmを測る。調整は不明瞭ではあるがナデと思われる。橙白色を呈す。008は甕棺胴部である。断面台形の突帯を1条巡らす。色調は橙色で外面は横ハケ、内面は不明である。009～015は甕である。009は口縁部で摩滅のため調整は不明。淡褐色を呈す。010は底径4.3cmを測る。両面とも淡黄褐色を呈し1mmほどの白色砂を多く含むとともに少量の雲母片を含む。調整は外面の一部に縦ハケが残る。内面はナデと思われる。011は甕棺底部である。復元底径11.4cmを測る。摩滅著しく調整は不明。外面は赤褐色、内面は橙色を呈す。012は縦に半裁した状態で1/2強を欠く。復元口径17.8cm、器高16.7cmを測る。外面は胴部が暗褐色で14×11cmの黒斑がある。内面は淡褐色である。外面は粗い縦ハケで口縁端はナデ、内面は不明瞭だが縦方向のヘラナデ後横ナデと思われる。013は復元口径38cmを測る。外面は煤が付着し暗褐色、内面は淡褐色を呈す。口縁内面に一部赤色顔料が付着する。外面は縦ハケで口縁は横ナデ、内面はヘラナデで口縁は横ハケを施す。胎土に1mm以下の白色砂を多く含む。014は口縁の約1/2を欠く。口径22cmを測る。外面は煤が付着し黒褐色、内面は灰白色で口縁端は煤が付着する。調整は外面が縦ハケで口縁部が横ナデ、内面は胴部が粗い斜め方向のハケで口縁は横ハケを施す。015は復元口径30.2cmを測る。淡赤褐色を呈し、横ナデを施す。

**SE1138**(第7図) 調査区北西部に位置する。建物基礎による削平を受けている。平面は東西にやや長い楕円形を呈し、長径78cm、短径65cmを測る。断面は検出面から50cm下に平坦面がある。検出面からの深さ100cm、底径20cmを測る。平坦面付近で壺底部片が複数分出土した他、完形の壺1点と長頸壺1点が出土した。出土遺物(第7図016～024)。016は二重口縁壺で口縁端に波状文を施す。胴部の孔は人為的な可能性がある。外面淡褐色で胴部下半に大きな黒斑がある。内面はにぶい橙色を呈す。調整は外面は全体にハケを施すが口縁が横、頸部が縦、胴部上半が横、下半が縦方向である。内面は口縁から胴部上半が横ハケ、胴部下半が縦ハケである。017は長頸壺で口縁の一部を欠く。口径7.3cm、器高17.7cmを測り、全体に赤褐色であるが、摩滅部分は淡褐色を呈す。頸部直下から底部にかけて大きな黒斑がある。調整は外面が縦方向のミガキ、内面は口縁から頸部にかけて横ハケを施す。微

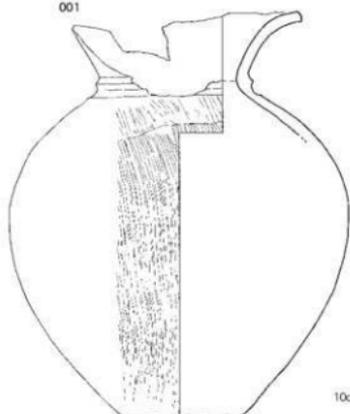
SE1128



H=5.90m



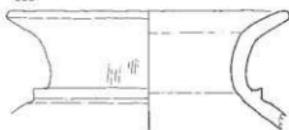
001



002



003



004



005



006



009



007



008



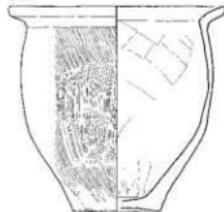
010



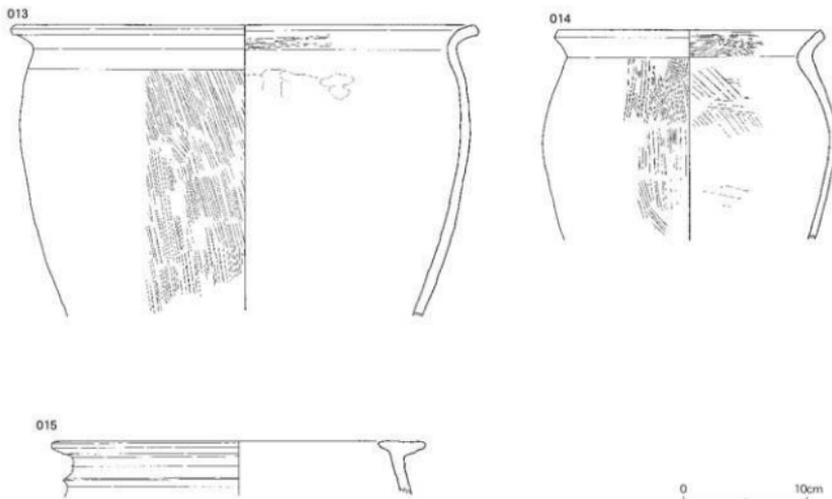
011



012



第5図 SE1128 遺構・遺物実測図(1/20・1/4)



第6図 SE1128 出土遺物実測図(1/4)

細な白色砂を多く含む。018は復元口径17.2cmを測る。摩滅が著しいが外面は胴部の一部に縦ハケ、口縁に横ナデが残る。内面は不明。赤色顔料の影響でにぶい橙色を呈す。1mmほどの白色砂を多量に含む。019は復元口径16.6cm、器高26cmを測る。外面は暗灰色だが摩滅した部分は淡褐色を呈す。摩滅が著しいが外面は胴部の一部に縦ハケ、口縁に横ナデが残る。020は口縁部の半分強を欠く。復元口径20.2cmを測り、外面は赤褐色で内面は赤褐色を呈す。両面とも横ナデを施す。021は器台で復元口径14cmを測る。全体が灰白色で口縁端部のみ淡褐色を呈す。外面は縦ハケ、内面はくびれから上が横ハケ、下が縦ナデを施す。胎土に砂はほとんど含まない。022は鉢である。復元口径15.9cm、器高7.6cmを測る。暗黄褐色を呈す。摩滅が著しいが外面は底部がへらケズリ、胴部下半の一部に粗い横ハケが残る。内面は横ハケを施す。2mm以下の白色砂を多量に含む。023は甕で復元口径17.2cmを測る。両面とも暗黄褐色を呈し、外面は口縁が横ナデ、胴部は縦ハケを施す。内面は口縁が横ハケ、胴部は斜め方向のハケである。024は礫岩製敲石である。13.0×8.6×6.5cmを測る。

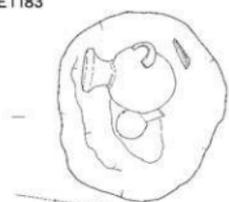
## 2) 溝

**SD1080**(第8図) 調査区南西端に位置し、緩やかな弧を描いて南西端は調査区外に延びる。調査区内での長さ2.7m、最大幅50cm、検出面からの深さ6～20cmを測る。竅穴式住居の壁溝などの可能性がある。遺物は弥生時代中期中頃の甕口縁と中期前～中の甕底部が出土したほか、弥生土器小片、黒曜石片が1点出土した。弥生時代中期中頃と考えられる。

**SD1139**(第8図) 調査区北西部に位置し、西端は調査区外に延びる。方位はN-68°-Eを測る。調査区内での長さ2.7m、最大幅35cm、検出面からの深さ3cmを測る。埋土は茶褐色土に黒色土ブロックが混じる。埋土中から弥生時代中期前～中頃にかけての甕片などが出土した。

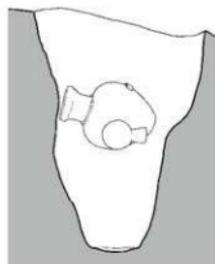
**SD1116**(第8図) 調査区中央で位置し、方位はN-73°-Eを測る。両端とも調査区外に伸び、調査区内での長さ8.2m、幅53～87cm、深さ36cmを測る。埋土は上半が暗茶褐色土、下半が暗灰茶褐色土を主とする。出土遺物(第8図025・026)。025は白磁碗底部である。底径6.6cmを測る。白磁碗Ⅳ類

SE1183

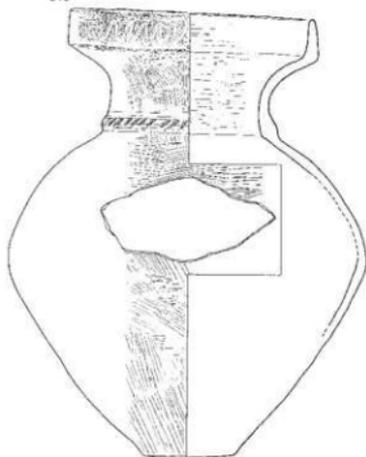


50cm  
0

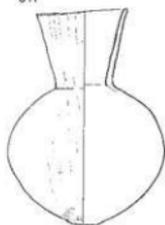
H=5.00m



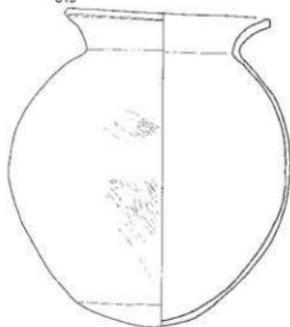
016



017



019



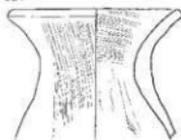
018



020



021



022



024

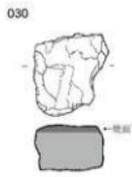
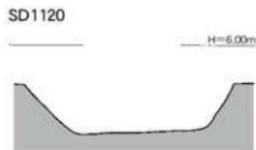
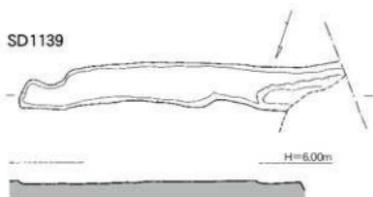
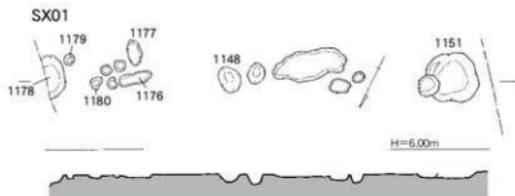
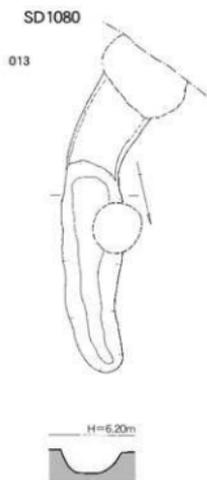


023



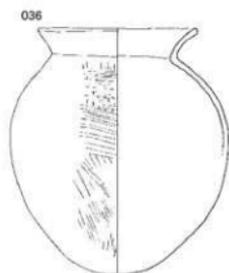
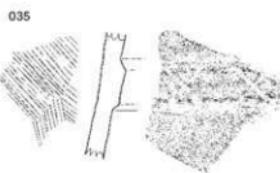
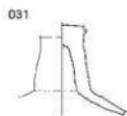
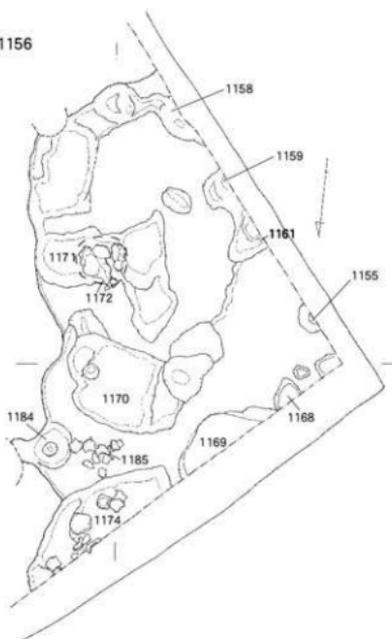
0 10cm

第7図 SE1138 遺構・遺物実測図(1/20・1/4)



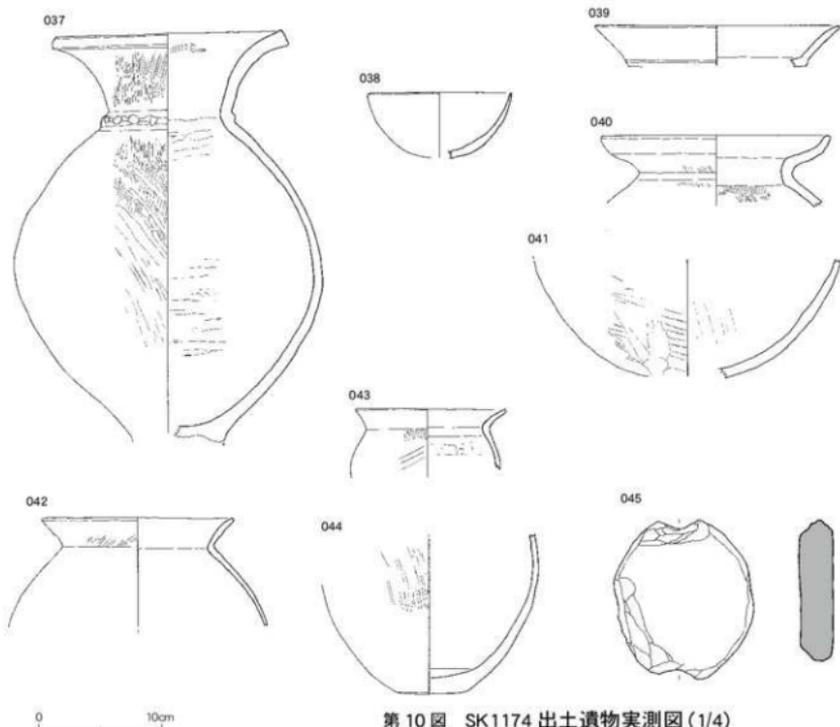
第8図 溝遺構・遺物実測図(1/40・1/4)

SC1156



0 10cm

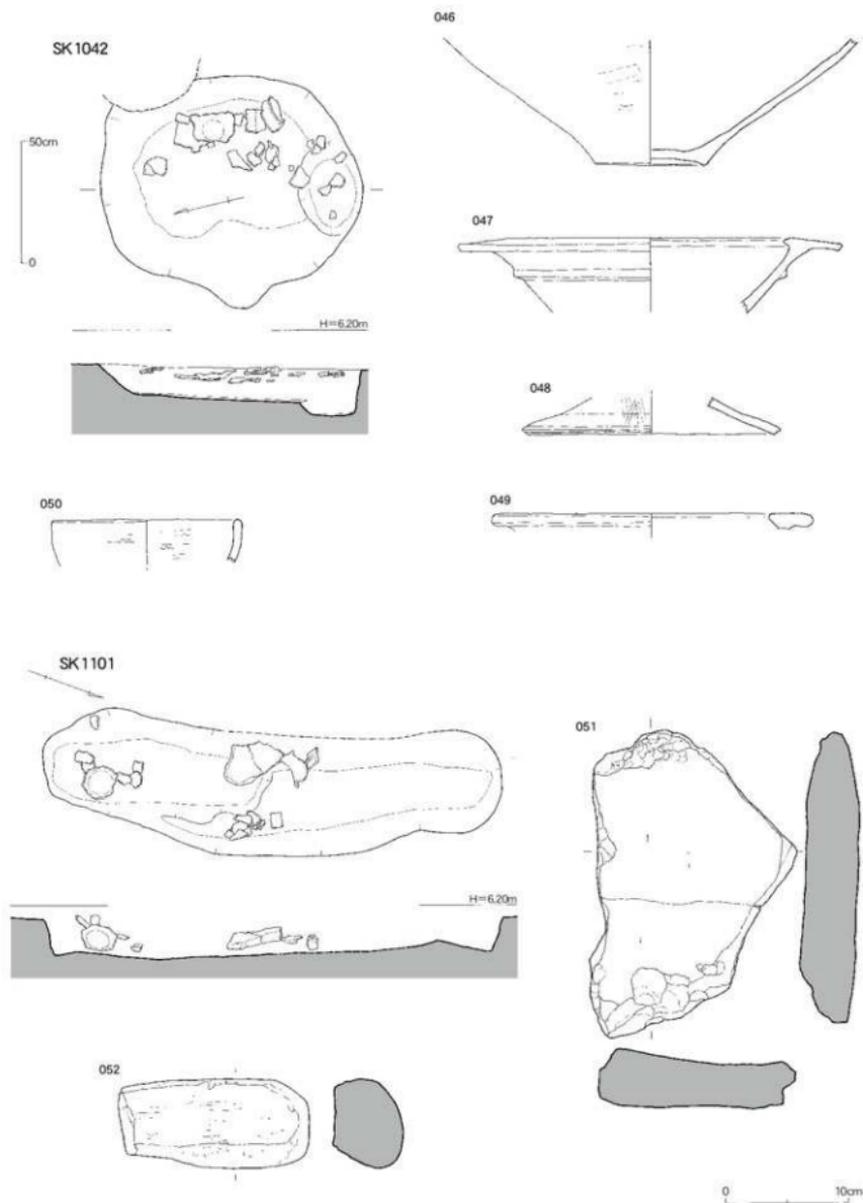
第9図 SC1156 遺構・遺物実測図(1/40・1/4)



第10図 SK1174 出土遺物実測図(1/4)

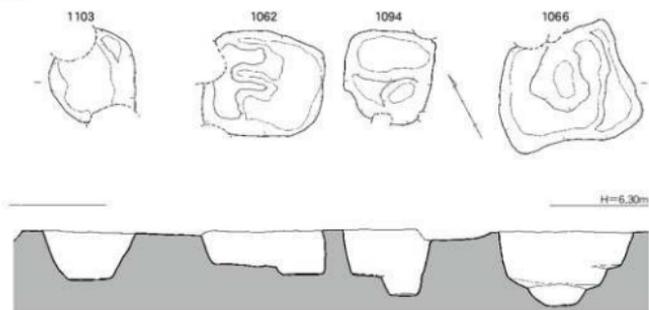
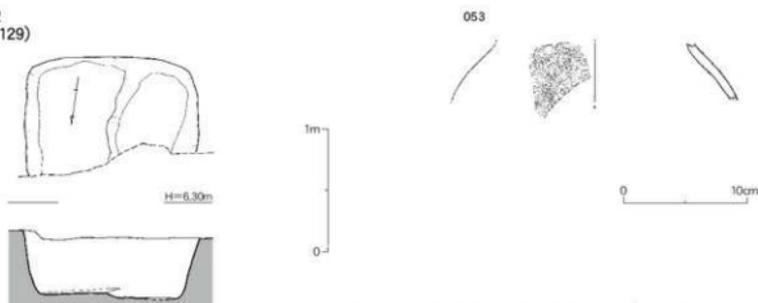
と思われ12世紀前半頃と考えられる。026は弥生時代後期の甕棺片である。幅3cmの突帯を貼付けX形の線刻を施す。その他に黒色土器碗のA・B類や須恵器坏(7～8世紀)、須恵器甕、須恵器坏蓋、須恵器大甕、小型丸底壺(古墳時代前期)、また弥生時代中期前から後期の土器も多く出土している。SD1120(第8図) SD1116の南側約2.5mに位置し、ほぼ平行する。両端が調査区外に伸び、調査区内での長さ8m、幅2.1～2.5m、深さ約80cmを測る。遺物は近世と思われる染付碗や陶器片、青磁片(不明)、陶器碗(朝鮮?)、紅皿、須恵器甕などが出土した。今回出土した近世の遺物は少なかつたものの西側の113次調査では多くの近世遺物が出土しており、近世後半～近代にかけての溝と考えられる。出土遺物(第8図027～030)。027～029は弥生時代中期から古墳時代の土器である。027は弥生時代中期の壺肩部である。外面は全体に、内面は部分的に赤色顔料が残る。図中央線左側の刷毛目にみえる斜線が線刻である。上・左・下側が破損し、残った線は12本で、上から下へわずかではあるが扇状に開く。028は復元口径14.2cmを測る。にぶい橙色を呈し、外面は縦ハケ後ナデ、内面胴部はヘラケズリを施す。029は復元口径16.4cmを測る。外面は淡橙白色を呈す。摩滅が著しいが口縁部は両面が横ナデ、内面胴部はヘラケズリである。030は炉壁である。片側が堅く焼けて灰白色を呈す。砂などは多く含まない。

SD1120(第8図) 調査区の北西部に位置し、SD1139に平行する。径10～30cmの小穴が並ぶ。生垣の根などの可能性がある。いずれも時期不明の素焼きの土器片が1～数点出土している。



第 11 図 SK1042・1101 遺構・遺物実測図(1/20・1/4)

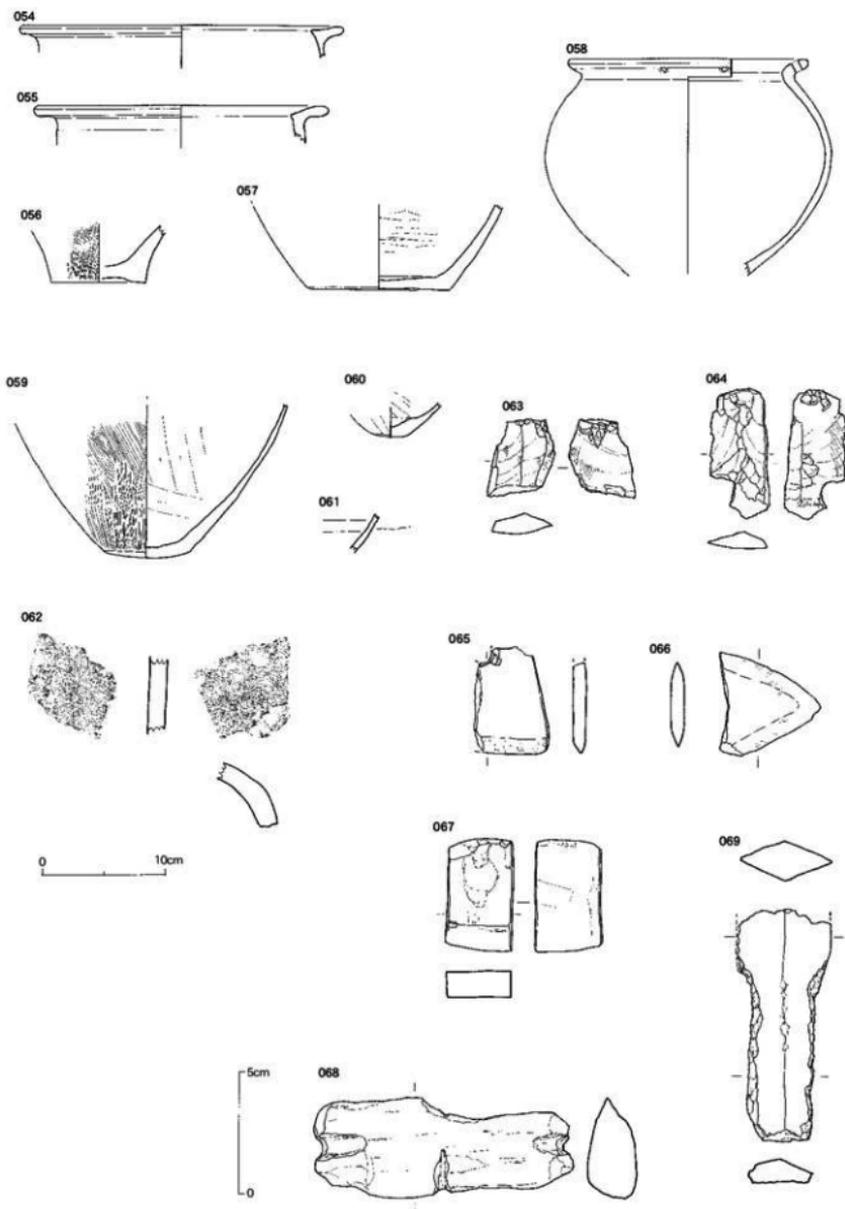
SB01

SB02  
(SP1129)

第12図 掘立柱遺物遺構・遺物実測図(1/40・1/4)

## 3) 竪穴式住居

**SC1156**(第9図) 調査区の北西隅に位置する。複数の掘り込みが集中しており、竪穴式住居の床下掘方である可能性がある。掘り込みのうち1172・1174・1185からは土器がまとまって出土した。出土遺物(第9・10図031～045)。031～033は1160から出土した。034・035は1169、036は1161、037は1171、038は1156+1170、039～045は1174からの出土である。031・032は高坏脚部、033は不明土製品で遺存状態は悪い。紡錘形を2つに折ったような形状で一部に丁寧なミガキがみられるが図の左側は摩滅著しい。036は口縁の一部を欠く。暗橙色で外面上半は横方向のタタキ後縦ハケ、下半は縦ハケを施す。037は壺である。底部は粘土接着面で剥がれている。頸部の突帯は刻目を施す。頸部から胴部上半は縦ハケ、胴部下半はヘラナデを施す。038は鉢で復元光景11.6cmを測る。淡橙色を呈し調整は不明である。039・040は壺口縁、041は壺底部である。042～045は1174の土層壁面清掃時に出土した。042は復元口径15.6cmを測る。表面の摩滅が著しいが、口縁両面は横ナデ、外面は頸部以下斜めのタタキ後縦ハケ、内面はヘラケズリを施す。厚さは2～3mmと薄い。043は復元口径11.8cmを測る。全体が被熱のため赤橙色を呈す。調整は不明だが、外面は斜めのタタキ痕が残る。044は壺底部で底径5.0cmを測る。外面にはいびき淡橙色で黒斑がある。摩滅著しく調整は不明である。045は玄武岩製石錘である。618.40gを測る。



第13図 その他出土遺物(1/4・063~069は1/2)

#### 4) 土坑

**SK1042**(第11図) 調査区南東部に位置する。平面は隅丸長方形で長径106cm、短径84cm、深さ29cmを測る。底面西端に深さ12cmの窪みがある。底面から20cm程上で土器が多く出土した。出土遺物(第11図046～050)。046は大型壺胴部下半である。底径9cmを測る。外面は丁寧なミガキで赤色顔料を塗布する。内面は摩滅のため不明。白色砂を多量に含む。047は高坏である。摩滅著しいが一部赤色顔料が残る。048は高坏脚部端で淡橙色を呈す。外面は粗いミガキ、内面はナデである。049は甕口縁、050は鉢の口縁である。内外面ともミガキで赤色顔料が残る。

**SK1101**(第11図) 調査区南西隅に位置する。主軸は南北方向で緩やかに弧を描く。長さ186cm、最大幅51cm、検出面からの深さ18cmを測る。弥生時代中期前～中頃と考えられる。出土遺物(第11図051・052、第12図054～058)。051は砂岩製砥石である。端部は部分的に整形しているが、自然面が多く残る。砥面は1面のみで裏側は凹石として使用している。052は安山岩製砥石である。一面のみを使用している。054～056は甕、057は甕棺、058は壺である。

#### 5) その他の遺構と出土遺物

**SB01**(第12図) 径80cm前後の土坑が並び、掘立柱建物の可能性がある。出土遺物(第12図053)。053は壺肩部で波状文の線刻を施す。この他に弥生時代中期中頃の土器片が出土している。

**SB02**(第12図) 調査区中央部西側に位置し、SD1120に柱穴の北半をきられる。東西径142cm、深さ54cmを測る。対応する他の柱穴はないが、一応可能性があるということで記載する。遺物は弥生時代中期前～中頃の甕片などが出土した。

**その他の出土遺物** 066は頁岩製の石包丁もしくは石剣、067は泥岩製扁平片刃石斧、068は滑石製石錘で十字に切れ込みがはいり、069は玄武岩製石剣の基部である。鏃をシャープに研ぎ出す。柄は刃潰しを施す。

**小結** 調査区南半では濃い密度の遺構群を確認した。中央部は削平されているが、本来は調査区全体に広がっていたと思われる。113次調査のような明確な大型掘立柱建物は確認できなかったがSB01・SK1103は大型建物である可能性がある。SD1116は113次調査の出土遺物から7世紀後半と考えられていたが、今回黒色土器椀A・B類や白磁碗の出土から12世紀前半まで下ることとなった。今後周辺の調査により更に時期が変更する可能性があると思われる。







1. I区全景(北西から)



2. II区全景(北東から)



1. I区南半遺構出土状況(南西から)



2. I区北半遺構出土状況(西から)



3. SD1116土層(東から)



4. SE1128遺物出土状況(北東から)



5. SE1128底部遺物出土状況(北東から)



6. SE1128完掘状況(北東から)



7. SK1042(西から)



8. SK1101(南西から)



1. SE1138 遺物出土状況(南西から)



2. SE1138 下層(南西から)



3. SC1156(南西から)



4. SC1156 土層(北東から)



5. SK1171 遺物出土状況(南西から)

## 報 告 書 抄 録

ふりがな	ひえ 86							
書名	比惠 86							
副書名	比惠遺跡群第146次調査報告							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第1374集							
編著者名	屋山洋							
編集機関	福岡市教育委員会							
所在地	福岡市中央区天神1丁目8-1							
発行年月日	2019年3月25日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
ひえ遺跡	福岡市博多区 博多駅南4丁目 122-4-7・8 123-3-6・8・9-10	40132	0127	33° 57' 93"	130° 42' 92"	20160801 ) 20160923	217㎡	共同住宅建設
	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
	集落	弥生時代中期～近世	井戸・溝・土坑・掘立柱建物	弥生土器・土師器・須恵器・貿易陶磁・近世陶磁				
要約	<p>比惠遺跡群は福岡平野の中央部を流れる那珂川と御笠川に挟まれた低位丘陵上に位置する。調査区の西側では那ノ津官家と推定される古代の大型掘立柱建物倉庫群が確認されている。</p> <p>146次調査では弥生時代後期の土坑と柱穴群、井戸2基の他に堅穴式住居の残欠と思われる掘り込みを確認した。また古代末と近世の溝が出土した。弥生時代後期の柱穴は堀方辺が1m近いものも見られ、西側の113次調査で確認したような大型建物が存在した可能性もあると思われる。</p> <p>遺物はパンケースで25箱出土した。井戸からは祭祀と考えられる完形の壺が出土したが、その他の柱穴や土坑から出土した遺物の多くは細片である。古代末と考えられる溝からは白磁片が出土しており13世紀ごろと考えられる。</p>							

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1374集

### 比惠 86

-比惠遺跡群第146次調査報告-  
平成31年(2019年)3月25日

発行 福岡市教育委員会  
福岡市中央区天神1丁目8-1

印刷 株式会社 宣巧社  
福岡市博多区吉塚8丁目7-30

